◆巻頭対談

紙＋電波＋インターネット。

３つのメディアが混在する
社会がつくる現地点と未来の姿

毎日新聞社執行役員 東京本社編集編成局長
小川　一 氏

ジャーナリスト／メディア・アクティビスト
津田　大介 氏

に聞く

INTERVIEW

日本に現存する最古の日刊紙である毎日新聞。その執行役員という、老舗紙メディアのど真ん中で日々、ツイッターを投稿し続ける小川一さん。ソーシャルメディアの寵児として知られ、社会の新たな可能性を追求し続けているジャーナリストの津田大介さん。2つの異なる立場から見えてくるマスメディアとソーシャルメディアの関係性、そして今後の日本社会の姿を刺激的に語ってもらった。

ソーシャルメディアの功罪

ー小川さんは取材現場などでツイッターを書かれるので、臨場感がありますね。

小川　そうですね。たとえば小泉元首相の脱原発の記者会見場で私がつぶやくと、あっというまに50くらいリツイートされている。小泉さんのひと言をみんなが注視しているし、一緒に熱くなっているという実感があります。

津田　ちょうど去年の頭くらいから、朝日新聞が記者個人によるツイッターを解禁しました。これまで新聞はデスクやキャップが記事をチェックして公表するという文化があった中で大きな変化です。他社の事例ではありますが、小川さんはどのようにお感じですか？

小川　毎日新聞の場合は記者一人ひとりが、自分たちの判断でやるというかたちですが、朝日は一括して上から下までどんとチームでやっていこうとしていて、それはさすがですね。今までの新聞社は、人と人をつなぐとき、自分がハブの真ん中に存在していると思っていたんです。しかしその発想は全然通用しない。リムの中の1つに入れてもらうことで、初めて見えてくることがある。それを新聞が気づき始めたのだと思います。

津田　かつてマスメディアは有識者の連絡先を独占していたんです。10年くらい前までは、作家の連絡先は全部出版社が持っていました。僕自身も単行本を出したら、出版社経由で仕事が来るような感じだったんです。またテレビ局や新聞は「この問題が起こったら、この大学のこの先生に聞け」とか「この犯罪ならこの弁護士に聞け」という情報があって、それが共有されていた。これがツイッターの時代になって、専門家が直接ソーシャルメディアにくると、一般市民が「あ、こんな専門家がいるんだ」と知って、日常的にやりとりができて、取材などの依頼までできてしまう。実はこういうところが崩れたのが大きいと思うんです。

ーツイッターは匿名メディアでもあります。その問題はありますか？

小川　匿名でもいいと思います。心の中で奥深く、こっそり匿名でつぶやきたいこともあれば、堂々と名前を出して言いたいこともあって。いろんなレイヤーに分かれている情報がさまざまに組み合わさって、その集大成として出てくれば。

津田　匿名＝悪という単純な話ではないんですね。ツイッターの場合、面白いのは、その人の評価、情報発信能力、社会的影響力がフォロワーとして数値化されます。たとえば匿名で責任を負わないような発言だけをくり返している人がいても、あまりフォロワーは増えない。その反面、社会から見ると問題視されるような意見でも、一定人数が集まれば、その人たちは自分たちがマジョリティーだという錯覚を起こしやすい。ネットではエコーチャンバー（共鳴室）と言われていますが、狭い部屋の中でひたすら同じ声が反響して、一定の思考回路を強化してしまうのですね。それが現実社会の行動にも繋がり、新大久保でおきているヘイトスピーチの問題などを助長している。しかし、かたや脱原発、再稼働反対のデモを20万人集めるということをソーシャルメディアはしています。これは両面が存在するので、ソーシャルメディアの功罪というより、もはやどちらが功で、どちらが罪か言いにくいです。

ーそういう時代だからこそ、人々の発想をたこツボ化させず、なにかしら風穴を開けることが必要なので

小川一さん

しょうね。

津田　ソーシャルメディアの時代に求められてくるのは、公共性、公益性とはなにかということです。最初は個人の考え方だったのが、ある程度似た考え方の人が集まったり、行動しやすくなったとき、小さなグループがたくさん世の中にできる。そのとき、小さなグループを串刺しして、大きな場でオープンに議論しましょう、みたいな役割を誰が果たすのか。そこは結局マスメディアしかないんだと思うんです。

小川　そう言っていただけると嬉しいです。また今の時代でも、やはりマスメディアの力は大きいなと思うことはありますね。たとえば復興予算の流用問題にしても週刊誌やフリーのジャーナリストがテレビや新聞に先駆けて報道をしていました。しかし結局、NHKスペシャルがオンエアされれば、世の中がドッと動くわけです。ソーシャルメディアの広がりとミックスし、ハイブリッドになったとき既存メディアはものすごくパワーを持つので、そういう役割分担ができればいいなと思います。

メディアとの新しい付き合い方

ーとはいえ既存メディアはネットのことがわからなくて、どうつきあっていいのか戸惑う部分もありますね。

津田　テレビも相当ネットを毛嫌いして対立関係にありましたが、震災などを経て、ここ2年くらいは融合が進んでいるように思います。新聞の現場でも変化はありますか？

小川　変わってきていますね。とにかく若い記者は子どものころからのユーザーですから、親和性があります。また東日本大震災のときに〝Pray for Japan〟の呼びかけで、世界から日本を励ますツイッターが集まったとき、涙なくして読めなかった。それでネットというものの価値観が変わったというか。みんなのいい感性が集まってくる素晴らしい場ではないかと思って、私もツイッターを始めたんです。

津田　今の小川さんの話はすごく示唆的です。実は日本人が当たり前にソーシャルメディアを使い始めたのはここ3年くらいのことなんです。最初にソーシャルメディアが注目されたのは2010年1月1日に当時の鳩山首相が首相としての立場でツイッターをやりますと言った。当時、マスコミはツイッターを「簡易ブログサービス」とか「ミニブログ」とか言っていたのを、ツイッターという固有名詞で表現し、説明をなくしてしまった。その変わり目が2010年です。当時のツイッター・ユーザーは日本で300万人くらい。40人にひとりなので、相当に新しもの好きとか、変わり者が使っていたサービスだったものが、今は1500万人から2000万人くらいがツイッターで何らかの情報に触れているので、3年間で6〜7倍に増えた。ツイッターが日常的な情報インフラに変わったという違いは大きいです。

小川　メディアの現場でも変化は大きいです。今年2月にグアム島でハネムーンに来ていた日本人観光客に車が突っ込んだ大変な事件、そしてエジプトのルクソールで熱気球が割れた事件がありました。あのときはツイッターの写真が毎日新聞で一面トップだったんです。今まではそう

いうことをどこかで逡巡していましたが、現場の鮮明なカラー写真ですから、文句なく一面トップにした。そのときから記者の雰囲気も変わってきています。また共同通信さんなんかもチームを作って24時間、ネットをチェックしているんです。すると110番より早く事件がわかる。昔は警察がまず現場に到着、それから記者発表があり、報道するという手順でしたが、今は警察官が現場に着く前にもう現場写真がアップされている。これを無視して報道はもうできないです。そういう意味でもソーシャルメディアの評価は劇的に変わっています。

津田大介さん

ー津田さんは27万人ものフォロワーがいますから、有力地方紙くらいの影響力をソーシャルメディアの中にお持ちですね。プレッシャーはありませんか。

津田　皆さんからの反響があるのは嬉しいです。また僕の場合、自分で有料のメルマガをスタートして、毎月630円を払ってくれる読者が8000人くらいいるんです。それで編集スタッフを雇ったり、取材にいく費用を稼げるので。いままでネットで書いていても、なかなかお金にすることができなくて難しいと思っていたんですが、ジャーナリズムみたいな方向でも、きちんとお金にできる環境ができたというのが新しいポジティブな変化ですね。

ー個人の立場で独立メディアを作るというのは大変なことですね。

津田　新聞社などを辞めてフリーになった人も基本的にテレビなり週刊誌なり、既存のメディアから仕事を得ないと収入にならないのが当たり前でしたから。しかし直接、市民からお金を得て、自分たちで独立してメディアをやるという選択がようやく現実的にできるようになってきたので、これはよかったなと思います。

これからの新旧メディアができること

ーツイッターもフェイスブックもやってみると非常に慌ただしいですね。また、みんなが常に依存的になって。あれはマイナス面ではないでしょうか。

小川　私の場合、やる時間はほぼ決めています。朝起きて一、二時間と会社の昼休み。そして夜、飲んだら決して触らない。なにをつぶやくかわからないから（笑）。また私はツイッターというメディアはスルー（無視）しても礼を失することではないので、無理にリプライなどをしなくてもいいと周囲には言っています。自分の時間の中でやらなきゃ。

津田　それはすばらしく、ちゃんとソーシャルメディアをわかってらっしゃる方の振る舞いだと思いますね。もともとソーシャルメディアは依存的になって、コミュニケーションのペースをすごく乱すものなんです。自分でルールを決めて、その枠の中で使わないと、どんどん際限がなくなるので。

ー自分をコントロールできる大人のためのツールかもしれませんね。

津田　具体的アドバイスを求められたときなど、僕は「スマートフォンの通知機能を必ず切りなさい」と言ってます。メッセージなどの緊急性が高いものは通知してもいいけど、「いいね」が1個ついたとか、細かいコメントがついたくらいの内容でいちいちポップアップで通知がきて、それを見に行くとキリがないし、それがないと不安になってしまう。ですから通知機能はオフにして、「この時間はフェイスブックを見にいく」などのタイミングで全部チェックするようにしなさいということをアドバイスしています。

小川　紙の時間軸と電波の時間軸と電子の時間軸を3つ、うまく切

り分けながら、コントロールするのが大事かなと思います。私も電車の中では本を読むことが多いですし、テレビは録画でなく、オンエアで見ます。

津田　僕もこういう仕事をしていると、ツイッターばかり見ているように思われるんですが、実際の情報収集は、ネットは3割。あとの3割は書籍、新聞などの紙媒体で、残り4割は人とあって、話をする。もちろん人によって割合はそれぞれでいいと思いますが、3つくらいの媒体からインプットをまんべんなくやっておくことが、今の時代には多分大事だろうなと思います。やはりネットの速さ、繋がりの可能性はマスメディアにできないことですが、ネットに出て表面化している情報は世の中のほんの少しでしかないということはわかっていましたから。

ー発信する側に立ったとき、自分なりのルールはありますか？

津田　「迷ったら必ず書く」と決めています。迷ってやめるということをやったら、全部の発言をやめなきゃいけなくなると一時期思ったので、書くようにしています。迷ったという時点で書きたいことなんだろうなと思って。

小川　私は日常的に人を批判する仕事なので、自分のつぶやきでは、基本的に個人の批判はしません。もちろん中傷はしません。日常的にも罪を重ねているので(笑)、プライベートでは罪を重ねたくない。できるだけ人の励ましになるようなことを書くようにしています。その点、ソーシャルメディアでアメリカにやられたなと思うのは「いいね」と「リツイート」ですね。今までは批判しかなかったネットの世界に、称賛というカテゴリーをつくり劇的に変えた。私も「いいね」の気分でつぶやこうという風に思っています。

津田　ソーシャルメディアは、同じ「メディア」という名称を使うのでマスメディアと敷衍(ふえん)して考えるというか、情報を入手する手段として考えがちですね。しかしソーシャルメディアはメールや携帯電話のようなコミュニケーション機能が混然一体となっているツールだということを理解して、その特性をわかった上で使う必要があるし、発信する側もそこを意識しないと炎上を起こす。意外とみんなはそこに気がついていないというのはあります。

小川　私も過去3回ほど炎上していて、最新はこの2月、アルジェリアの人質事件で、被害者の名前を実名で報じるべきだといったら、ものすごく炎上した。でもその時と、過去の2回の炎上でちがったのは、がんばってくださいというダイレクトメッセージが届くんです。また公然と「小川さんの言っていることは正しい」と言ってくれる人がいる。こ

ういうのは過去には全然なくて、炎上したら燃えっぱなしでしたが、今は消火に来てくれる人がいたという変化は大きいですね。

津田　ツイッターを読んだ人にどう伝わるのかという想像力がより求められるのでしょうね。いままでなら取材のノウハウがあって、その文法があったわけでしょうけど、ソーシャルメディアにはそれがなくて。どちらかというとキャラがすごく大事です。暴言をどれだけ吐いても許されるキャラを確立すると「またあいつか」みたいな感じで諦められるみたいなところがあって。

―津田さんも炎上しますか？

津田　僕は日常的に叩かれたり、炎上もするんですが、その原因になった発言を見ると、すごく普通のことだったりします。原発に関して言えば「脱原発をすべきだと思うけど、すぐには無理なのでバランスとってやっていくしかない」など、真ん中を取る発言すると、両方から叩かれるみたいな。また外形的事実だけで炎上していくというか、簡単に白黒のラベリングして、内容をよく読んでくれません。

小川　でも津田さんの場合、27万人が支えているので基本的に炎上はしていないと思いますよ。炎上させる方もそれだけの人に支持される人に悪いことは言えないです。人々のつながりが累積することで、抑止力がものすごく強くなっていくのではないかと思います。

―新旧メディアの立場を踏まえて、それぞれに期待することはなんでしょう。

小川　津田さんのように革新的に人と人を繋いで、マネタイズしていくという行動はマスメディアもできていません。ネットの中の志とか夢とか希望がお金になって、それがさらに夢や希望になる。我々の様なマスメディアとちがって、それをたったひとりでやられているというのに敬意を表したいし、今後も大成功をすることを祈っています。

津田　小川さんのような人が既存のメディアにいて、どんどん出世されているというのが希望だと思います。今後、若手の記者で、いろんな面白いことをやったり跳ねっ返りみたいな行動が出たときに守って欲しいと思います。また僕らより下の世代で、ネットを使った面白いメディアの動きが出てきたとき、連携できるところは連携して、どんどん進んでいって欲しいですね。今後はマスメディアとネットが混然一体となって、融和していくフェーズになっていくと思います。そういう意味でもここから10年がすごく大事だなと思います。

―その通りですね。。これは、民主主義の成熟へのレッスンだと思います。ぶつかり合いながら、少数意見も尊重されながら、合意も相違も明確にしていく。両者の融合から、新たな価値観が確かな形でつくられていくプロセスが楽しみです。ありがとうございました。

インタビュー
公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長 髙橋 陽子

PROFILE

小川　一（おがわ・はじめ）氏

1981 年、毎日新聞社に入社し社会部に 18 年間在籍。社会部長を経て、現在は毎日新聞社執行役員。東京本社編集編成局長。ソーシャルメディアとマスメディアの協働を追求。ツイッターアカウントは @pinpinkiri

津田　大介（つだ・だいすけ）氏

ジャーナリスト／メディア・アクティビスト。
1973 年東京都生まれ。メディア、ジャーナリズム、IT・ネットサービス、コンテンツビジネス、著作権問題などを専門分野に執筆活動を行う。ソーシャルメディアを利用した新しいジャーナリズムをさまざまな形で実践中。